

大正期におけるエミール・ヴェルハーレン移入（一）

大場 恒明

一 鷗外・敏ライン

森鷗外は明治三五年小倉から東京に帰還すると早速六月、一二歳年下の上田敏と提携して「芸文」を、さらに一〇月「万年艸」を創刊した。この協同関係は、二〇世紀をむかえたばかりの西洋文学の情報を受信するひとつの強力なチャンネルとなって、日本近代文学史に新風を送りこむことになった。

鷗外の『青年』（明治四三―四四）は、地方から上京した作家志望の青年小泉純一が明治末期の東京の知的世界で体験する人間的、思想的交流を描いた小説であるが、鷗外は主人公の若者に託して、日本近代文芸界の青春を描きたかったのかもしれない。当時の文学者や思想家など知識階級の覇気と銜気から発する燐光のように、フランス語の単語がページの随所に散りばめられている。引用される西欧の哲学者や作家の名前は、明治末期における知識人たちの関心の所在を示す指標でもある。

メーテルリンクやルモニエなどベルギー作家にも言及

されていることには、上田敏の紹介に発する受容の軌跡を見ることができ、とくにエミール・ヴェルハーレン（鷗外はドイツ語ふうにフェルハアレンと表記している）について、主人公に、「此間 La Multiple Splendeur が来たもんですから、それを国から出て来るとき、汽車で読みました。あれには大分纏まった人生観のやうなものがあるのですね。妙にかう敬虔なやうな態度を取ってゐるのですね。丸で日本なんぞで新人だと云ってゐる人達とは違ってゐるもんですから、へんな心持がしました。（・・・）あのフェルハアレンの詩なんぞを見ますと、妙な人生観があるので、それが直ぐにこっちの人生観にはならないのですが、其癖あの敬虔なやうな調子に引き寄せられてしまふのです」⁽¹⁾と語らせ、ヴェルハーレンの詩の深遠な思想性とまどいながらも共感している主人公の感懷を、鷗外も共有している。

鷗外は主にドイツの新聞・雑誌等定期刊行物を情報源にして、明治四二（一九〇九）年三月から大正二（一九

一三) 年一二月まで雑誌「スバル」に「棕鳥通信」の表題で、引き続き大正二年一二月から翌年九月まで雑誌「我等」に「水のあなたより」の表題で、海外通信を連載した。ヨーロッパ各地の文芸界、芸術界、政界などの消息が、三行記事ふうの短信の形が多いにせよ、リアル・タイムで伝えられた。たとえば、一九一四年七月一五日発のニュースとして、「水のあなたより」で、オーストリア皇太子夫妻がサライエヴォでセルビア青年に暗殺された経緯を生々しく報じ、「公爵と妃との横死はヨオロッパの大戦乱の基になるかも知れない」と予言している。ベルギー作家ではメーテルリンクに関する情報が多々とも多いが、それについてヴェルハーレンの消息もたびたび伝えられている。

ヴェルハーレンはじめベルギーの詩人には法学士が多いことを指摘し、メーテルリンク、ロデンバック、エルスカンプ、ジルキンなどの名前を紹介している記事などとなるにたらない情報もあるが、ヴェルハーレンがドイツとオーストリアの各地を朗読旅行したというニュースの⁴⁾ように、当時のヴェルハーレンの活動を知るためには貴重な記事(一九二二年二月二八日、三月三二日発)もある。ヴェルハーレンは公人として演説をする機会が多かったが、つぎの二つの記事は、ベルギーの国家的詩人としてのヴェルハーレンのポジションを象徴的に語っている。

「白耳義王 Albert 第一世は Brussels 博覧会の大座敷へ、国内の文士を悉く招いた。集会は正午から午後五時まで続いた。王妃が臨場せられたとき、文士総代として Emile Verhaeren が挨拶をした。「陛下」と云ふ詞文は使ってあったが、其他一切の敬語を省いた、頗る振ったものであった。(一九一〇年八月六日発)」

もう一つは、ルモニエの追悼会での演説を報じたもので、「一切の名聞を抛った詩人の生活を歎美する詞で、同時に自家の志を陳べたやうに聞えた。席の左右に司法大臣と美術大臣とを据わらせて置いて、名聞無価値の論を吐いたのは、一層面白かった。(「水のあなたより」一九一三年一月二日通信)」と、ヴェルハーレンの人物像を髣髴させるようなエピソードを伝えている。

二 翻訳戯曲

ヴェルハーレンには戯曲が四編ある。『黎明』(一八九八)、『僧院』(一九〇〇)、『フィリップ二世』(一九〇二)、『スパルタのヘレネ』(一九一三)で、最後の戯曲はフランス語のオリジナルが公刊される三年前の一九〇九年、ロシア語とドイツ語の翻訳が相次いで出版される、というように通常とは逆な順序で世に出た。⁷⁾

劇作に傾倒し、戯曲翻訳も数多く手がけた鴎外は、ヴェルハーレンの戯曲がヨーロッパの演劇界でどう受け

入れられているかということについて、当然無関心では
いられない。「棕鳥通信」と「水のあなたより」には、た
びたび消息がとりあげられている。

まず『スパルタのヘレナ』について「仏文ではまだ興
行せられてゐない Verhaeren の脚本『Helena の帰郷』は
スツットガルトで興行せられた。芝居らしくないことは
極端であるさうだ。(一九一一年一月九日発)⁽⁸⁾」と報じて
いるが、このドイツ語版はシュテファン・ツヴァイク訳
により一九〇九年ライプツィヒで出版されたものであ
る。『スパルタのヘレナ』はギリシャ神話の、トロイア戦
争の因となった美女ヘレナの挿話を劇化した四幕悲劇で、
ツヴァイクの独訳では表題が「ヘレナの帰還」となっ
ている。ヴェルハーレンのどの戯曲にも共通するのである
が、台詞そのもののなかに詩的劇性があり、登場人物や
筋の劇的行為に主体を置く戯曲とはきわめて異質なので、
写実的演劇に慣れた観客は「芝居らしくない」と受けと
り、まごつくことになるだろう。この作品のパリ初演に
ついて「Helena von Sparta は Emile Verhaeren の脚
本で、Chatelet (Paris) で初興行をした。女主人公は
Ira Rubinstein が勤めた。(一九一二年六月一日発)⁽⁹⁾」と
きわめて貴重な情報を伝えている。パリのシャトレ劇場
での初演は一九一二年五月四日夜で、舞台環境の悪さも
あって演出家も俳優たちも苦勞したらしいが、つめかけ

たヴェルハーレン詩の理解者たちは幕がすすむにつれて
熱狂したという⁽¹⁰⁾。

ヴェルハーレンの戯曲のなかでもっとも成功したのは
『僧院』であろう。一九〇〇年にブリュッセルで出版さ
れて以来、何度もパリで再版され、ロシア語訳、独訳、
英訳、イタリア語訳、オランダ語訳が引き続いて出版さ
れた。独訳はツヴァイクが、英訳はオスマン・エドワー
ズが手がけている。

「棕鳥通信」と「水のあなたより」でも『僧院』関連の
記事が多い。「Kammerspiele (ベルリン) で Verhaeren の
『Kloster』を出す」、「キーンでは Verhaeren の『僧院』
の興行を禁ずるらしい。(一九一一年一月九日発)」、「ベ
ルジックの俳優 Carlo Liben の一座がハイデルベルヒで
Le Cloître (僧院) を演ずる。(一九一四年七月一五日
発)」といったぐあいだ、これらの情報も研究上の資料的
価値はきわめて大きい。

四幕悲劇 *Le Cloître* (『僧院』) は、一九一七年四月、当
時のフランス演劇で主導的役割をはたしていた演出家
リュニエールによって上演され、象徴主義演劇の演目
の一つとしてフランス国立劇団コメディ・フランセーズ
のレパートリーに加えられた。

処女詩集『レ・フラマンド』(一八八三)で、フランド
ルの大地を生動させる農民像を、ブリュッゲルのように、

色彩豊かに、荒々しいまでに写實的に、官能的に、むせかえるような沸き立つエネルギを描き、ルーベンスの豊満な女体に見るようなフランドル人の現世的で豊饒な生命力を謳歌した。第二詩集『修道僧』（一八八六）は、処女詩集と対極をなす双幅の詩集で、ヴェルハールンは一転して、フランドル人の内面生活を地下水脈のように潜流する中世的で神秘的な想念を、修道僧たちの瞑想生活を通して描いた。

ヴェルハールンは一八八三年七月から八月にかけて、ワロン地区の町シメイ(Simay)の南にある寒村フォルジュ・フォレスのトラピスト修道院で体験修行を行った。¹⁰² この実践から生まれたのが詩集『修道僧』と戯曲『僧院』である。詩集『修道僧』の背景と詩的世界を劇的に造型し、神秘的な僧院の空間と人物たちのなかに内面のドラマを三次元的に構造化し視覚化したのが『僧院』である。

かつて父親を殺害したうえに、身代わりに捕らわれた無実の男が処刑されるのを黙視し、修道院の院主の庇護のもとに修道僧となったバルタザールは、院主の後継者と目されている。ある日、同じような罪を犯して懺悔に來た男を司法の手にゆだねたバルタザールは、過去の罪について良心の呵責に耐えられなくなる。院主の制止をふりきり院内の僧たちに懺悔しただけでは神の許しによる平安を得られず、公衆の面前に自訴する。常日頃バル

タザールと対立して院主の地位をねらうトマは、この機に乗じ、盟友の有力修道僧をも踏みにつけて、院主の指名を受ける。

日本にはじめて翻訳紹介されたヴェルハールンの戯曲が『僧院』で、これを翻訳したのが鴎外である。実弟篤二郎（三木竹二）が主宰する「歌舞伎」の第一三九号（明治四五年一月）から第一七一号（大正三年九月）まで中断をはさんで計一二回にわたって掲載され、¹⁰³ 大正四年翻訳戯曲集『稲妻』に収録された。¹⁰⁴

この時期は鴎外の、いわゆる「豊熟の時代」であり、五条秀麿を主人公とする連作小説や歴史小説において思想的深化と拡充をはたしていた鴎外にとって、『僧院』の世俗を超越し隔離された世界の威信と規範を守ろうとする院主の立場や、神への信義と俗界の正義の対立、組織内の権力抗争などのテーマは、無縁ではなかったろう。

ヴェルハールンの戯曲は、*drame lyrique* の形式で書かれた作品で、詩劇と言うこともできるが、古典劇のように定型の完全韻文ではなく、登場人物の悲壮味を帯びた長台詞が、音節数と脚韻を守った定型に統一されることなく、ときに脚韻をふみ、詩的律動をもって、いわば「詠われる」のである。自由詩が散文にまじっている、とも、またその逆とも言える。

バルタザールが公衆に懺悔する場面を例示すれば、

Moi, Balthazar duc de Rispaire,

J'assassinai, avec ces deux mains sanguinaires;

Regardez-les, ce sont des mains

Plus féroces que des mâchoires;

Les juges souverains

N'ont point voulu, dans leur prétoire,

Plairer le sang indélébile

Qui imprégnait ces mains obstinément lavées,

Mais aujourd'hui vous tous qui le savez,

Allez le dire et le crier aux gens des villes,

Allez le proclamer...

の如くであって、この原文をツヴァイクは次のように訳している。

Ich, ich, der sündige Mönch Balthasar,

Der einst ein Herzog, ein Großherr war,

Mit blutigen Händen hab ichs getan!

Mit diesen Händen, seht sie nur an,

Die wilder waren als reißende Zähne,

Hab ichs getan!

Doch jene,

Die mein Verbrechen bestrafen sollten,

Sie wollten

Auf diesen Händen, den ewig befleckten,

Das unabwachte Blut daran

Nicht entdecken,

Geht es verkünden,

Geht es erzählen von Haus zu Haus,

Oh, schreit es weit in die Welt hinaus!

ツヴァイクは原文の脚韻を伴った自由詩の詩的韻律を巧みに写しとっているが、この底本に拠り鴎外は次のように訳している。

「わたしは、此罪深い出家バルタザルは、その昔公爵と呼ばれ世に敬はれた身でありながら、さうした事を、此血腥い手でしたのぢや。皆のもの、見てくれい。猛獣の牙より鋭い、此手でしたのぢや。それに、わたしのその罪を罰してくれんではならぬ人達が、永遠に洗ふ事の出来ぬ、此手の血潮を、見て見ぬ振りをするのぢや。併しけふこそは、お前方皆の衆がわたしの口から聞いたからには、どうぞ此事を世間に知らせくれい。家から家へ語り伝えてくれい。世界の隅々まで大声で知らせてくれい。」

フランス語原文やツヴァイク訳の詩的悲壮美が薄められてしまうのは、言語構造の違いのしからしめるところで止むを得ないが、鴎外は、この作品のdrame lyriqueとしての形式よりもテーマの思想性のほうにより多く関心をひかれていたせいでもあろう。

訳了したのは大正三（一九一四）年八月一日日であつたことが、その日の日記に「鈴木本次郎来て筆授し、僧院の訳全く畢る」とあつて知られる。春浦と号した鈴木本次郎は劇評家で、三木竹二のもとで「歌舞伎」の編集にたずさわるかたわら、「万年艸」合評会の書記をつとめたことから鴎外の口述筆記者となり、多くの翻訳作品の訳出現場にたちあつた。追悼文「鴎外先生」のなかで春浦は「三木氏病没後、三木氏が力を尽くしてゐたものとして、『歌舞伎』の爲めに、西洋の脚本を翻訳して下さるに就き、私は三木氏生前からの筆記を引き続いて廃刊まで七、八年に及びました。『歌舞伎』で最後に訳了した脚本は『僧院』でしたが、此れは宗教の詞が多いので、なかなか先生も骨を折られたものでした」と回想している。ヴェルハーレンの戯曲のうち邦訳されたものは、ほかに『フィリップ二世』（三幕史劇）があり、これは大正七（一九一八）年、仏文学者で評論家の新城和一によって「白樺」四、五月号に訳出・掲載された。スペイン王にしてフランドル領主フィリップ二世は自由の迫害者としてフランドル人の宿敵であり、王と側近の聖職者たちの陰謀によって殺害される王子ドン・カルロは愛と自由と情熱の戦士でありフランドルの同志である。全フランドルの大地と歴史から生命愛と雄渾な律動を汲み取るヴァルハーレンは、この史劇のなかで、生命の歓喜と強暴な抑

圧との抗争を描いた。この戯曲が「白樺」誌上に翻訳された意味は大きい。大正初期から中期にかけて、「白樺」を中心に醸成された、生命と自由を謳歌する思潮のなかで、ヴェルハーレンの詩業が高村光太郎や社会派の詩人たちによって受容されていくことになるからである。

三 与謝野寛の欧州旅行と『リラの花』

明治四四（一九一一年一月八日、与謝野寛は横浜港から熱田丸に乗り、神戸に寄港してからヨーロッパに向かった。東京で新詩社を興し、明治三三（一九〇〇）年四月創刊した「明星」を拠点にして、以後晶子とともに一時代を劃した鉄幹であつたが、明治四一（一九〇八）年一月「明星」廃刊という痛手を負ってから、文学活動もめっきり停滞した寛に、起死回生の新天地を拓かせるべく、ヨーロッパ旅行を強く勧めたのは晶子だった。

パリに着くと、とりあえずカルティエ・ラタンのパンテオン近くにあるオテル・スフロに旅装をといた。ここは日本から来る芸術家のいわば定宿で、「明星」時代の門人高村光太郎も、寛より一足はやく明治四一年にパリに滞在した際、一時泊まっていたホテルである。間もなくモンマルトルのヴィクトル・マッセ街で画業の研鑽を積んでいた梅原龍三郎と同じアパートマンに移った。

そのうち晶子は、夫から半年遅れて明治四五（一九一

二〇年五月一九日、陸路シベリア經由でパリに到着した。

晶子はロダンを訪問するのが念願だった。当時、日本では「白樺」を中心とする芸術運動のなかでロダンは目指す巨峰の一つであった。高村光太郎は日本でもっとも早く明治三六年からロダンに注目し傾倒した人物なのに、明治四一〜四二年の滞仏中ロダンに会うことはなかったが、夫妻は光太郎からロダンに関する知識を得ていただろう。有島生馬の紹介状をもってアトリエを訪れた夫妻に、ロダンはかつて自分が指導した荻原守衛のことを回想して、「彼は善く自分の製作を觀て自分の芸術の精神を領解した。仏蘭西人よりもより善く領解した。そして、自分の芸術を模倣せずに彼自らの芸術を発見した」と激賞し、「彼の死は彼の不幸のみで無い」と言つて惜しんだ。晶子にとってロダンを訪問したことはヨーロッパ旅行のもっとも強烈な体験だったようで、帰国後生まれた四男に「アウギュスト」と命名したほどであった。

寛の門人、知人にはヨーロッパ通の芸術家、詩人、学者が多数いたから情報にはことかかなかっただろうし、「予の欧州に赴いた目的は、日本の空氣から遊離して、氣樂に、且つ眞面目に、暫らくでも文明人の生活に親むことの外に何もなかった」とみずから言うように、寛は積極的に芸術・文学の新風にふれ、フランス人の詩人たちとも交流した。

当時のパリは第一次世界大戰勃發前夜で、一九世紀文学思潮もようやく遠くなり、新しい文学・芸術が興っていた。寛はモンパルナスのカフェ、クロズリ・デ・リラに若い詩人たちが寄り集まつて自作を発表しあったりする「火曜会」に足しげく通い、詩人ポール・フォールに紹介されたり、アポリネールを望見したり、フランス現代詩の生成現場を肌で感じていた。

寛と晶子には日本の新聞・雑誌との間に、ヨーロッパの旅行記事を寄稿する契約があり、イギリス、オランダ、ベルギー、ドイツ、オーストリア、と精力的にまわったが、この折の紀行文をもとにして、帰国後の大正三（一九一四）年、夫妻の共著という形で『巴里より』が出版されることになる。

晶子は東京に残してきた七人の息子たち娘たちが日々案じられ、ホームシックに耐えられず、大正元（一九一二年）九月二一日、夫をおいて今度は海路、マルセーユから平野丸に乗り帰国の途についた。

寛はパリ滞在のおわりが迫るのを気にしながら、二つの計画を実現しようとしていた。一つはイタリア旅行で、もう一つはヴェルハーレン訪問であった。

イタリア旅行をひかえ、寛はモンマルトルのアバルトマンを引き払い元のオテル・スフロに移った。近くに住んでいたパリ大学留學生で理学士内藤文吉という人物と

寛は気が合い、レストランもカフェも散歩も一緒というぐあいで、親交を結んだ。この人が通訳をかってでてくれたお陰で、フランス人の知己を得る機会もふえた。

散歩はよくパリ郊外にあるサン・クルーの森を目指した。その理由について、「森其物が四季折折に面白い許で無く、行に機関車附の旧式な乗合車の二階に乗って、モネが屢描いたサン・クルウ橋を渡り、帰りに八錢均一の小蒸気でセエヌを遡るのも面白い。(・・・)詩人エールアレン翁が住んで居ると云う事もサン・クルウの好きな一つの理由である」と寛は書いている。

ヴェルハールンに関する情報は、当然、「明星」にヴェルハールン詩を翻訳し、この詩人を日本に紹介した最大の功績者である上田敏から、さらに、観潮楼歌会や「スバル」を通しての生涯の恩師である森鷗外から得ていたにちがいないが、明治四三(一九一〇)年七月、ヴェルハールン詩篇「あはれなる者(二月)」を雑誌「創作」に訳出した高村光太郎も情報源になっていたかもしれない。

ヴェルハールンは一九〇三年からサン・クルーに住んでいた。有力文芸誌「メルキュール・ド・フランス」の編集長アルフレッド・ヴァレットからもらった紹介状を携え、内藤氏と二度訪れたものの、主人はベルギーに帰国中ということで不在だったが、留守をあずかる管理人の婆さんから、かつて日本の奥(またはオト)大将と島川

少将を泊めたことがある、と聞かされたりして、無駄足ながら愉快な思いを抱いて帰ったこともあった。

寛は、そのままイタリア旅行に出かけたが、そこから戻ると、今度は前もってランデヴーをとり、三度目の訪問をはたした。この折の訪問の様子を寛は詳細に記録にとどめていて、この会見記は日本のみならず外国のヴェルハールン研究者にとって、きわめて貴重な資料的価値をもつものなので、長くなるが以下に引用する。

「扉を開けて呉れた快潤な女中に名刺を渡すと、気軽な詩人は直ぐに出迎へて握手し乍ら「あなた方は此遠方へ三度まで訪ねて下さって初めてお目に掛る事が出来たのですね」と云った。(・・・)エールアレン翁が前に二度其留守へ尋ねた予等の事を覚えて居て呉れたのは嬉しかった。(・・・)翁の書斎は予が見た此国の他の文学者の書斎に比べて非常に狭く且つ質素な物で、六畳敷程の二室を日本の座敷流に真中を打抜き、其れに幾つかの大きな書棚や二つの大きな卓其他が据ゑられて居るから、やっと四五脚の椅子を並べる空席がある許りだ。予等の外に白耳義の青年詩人が一人先に来合せて居た。翁は自分の椅子を予に与へて暖炉の横の狭い壁の隅へ身を退いて坐られた。

室内は流石に詩人の神経質な用意が行渡って、筆一つでも歪んで置かれない程整然として居た。小さな卓に菊

の花が活けてあった。四方の壁に幾十の小さな額が掛けて居るが、見渡した所凡てが近頃の新しい作家の絵許であるのは一奇だ。予が幾枚かの浮世絵を呈したので、談は日本画に移ったが、久しく東洋の研究に興味を有って居る翁が我浮世絵の作家の名を幾人もすらすらと列挙して「自分は春信をより多く好む」などと肯綮に中った批評をせられたのは意外であった。詩人レニエ氏の髭も有名だが、エルアレン翁の頤まで垂れ下った口髭も名物である。翁は少し背を屈めて其口髭のある顔を前に出し乍ら、予等の為に自家の詩に就て快瀾に色色と語られた。「或人は自分の作物に東洋の思想と共通の点があると評したが君達は何と思ふか」と問はれた。又「自分の作物を読んだ一外国人が自分に向って印度へ旅行した事があるのだらうと問ふから、否と云ったら、其れは不思議だ、あなたの或象徴に用ひた花が同じ様な意味で印度の何処かの門に描かれて居ると云ったが、全くの暗合だ」とも語られた。

予は又晶子が翁に呈する為に残して置いた「春泥集」を翁に贈った。翁は日本の三十一音から成るタンカを知って居て、「今も猶如此き素朴な詩の作られるのは懐かしい」と云ひ、其装幀の美を褒めて「之が自分の書齋へ来た最初の日本の出版物だ」と云はれた。談は出版物に及んで「先年日本の書肆の希望に任せて小さな一書を

東京で出版した事がある」と語られたのは予等に取って初耳であった。予が先生の新しい詩集「戦ぐ麦」の特別刷を買った事を告げたら「其れは好かった。もう一月前に品切と成ったので此某君などは買遅れた相だ」と傍の若い詩人を見て云はれた。

翁は日本の詩壇の近状を問ひ、仏蘭西の象徴主義の影響した事を聞いて驚き、主な日本詩人の名を予等より聞いて書留められた。翁は死なない中に一度日本を訪問すると云はれた。翁の名をエルアレンと発音し、同じく白耳義人であるメエテリンクをメテルランクと発音することを今日翁に質して知った。翁は其詩集「触手ある都会」を其初めに自署して予に与へられた。翁の夫人に会ふことを得なかったが、翌朝翁と夫人から鄭重な礼状を受け取った。夫人に捧げた日本の織物に対してである。¹⁰ヴェルハーレンは与謝野寛が面談してから四年後、第一次大戦中の一九一六年一月二七日、講演のため訪れていたルーアンで鉄道事故のため六一歳の生涯を閉じた。寛が招じ入れられた書齋は後に移築され、現在、ブリュッセルのアルベール一世王立図書館内に復元されているが、ここに入って見ると、寛の観察眼と記録の正確さに驚かされる。

この訪問の際に持参したヴァレット編集長の紹介状（名刺）と、贈呈した晶子の歌集『春泥集』¹¹（明治四四

年)などは、王立図書館の文書資料館に所蔵されている。

なお、ヴェルハーレンが「先年日本の書肆の希望に任せて小さな一書を東京で出版した事がある」と言っている「小さな一書」とは、日本の風物を錦絵ふうに刷った木版画にヴェルハーレンの詩を賛にした和綴本 *Ingles Japonaises* で、長谷川武次郎が出版したものである。⁹³これは一九〇〇年のパリ万博に出品されたものと言われるが、この本の所在を与謝野寛がまったく知らなかったのは意外な気もするが、流通の範囲が好事家たちの間に限られていたせいであろう。

寛は大正二(一九一三)年一月帰国すると、翌年一月、滞仏中に集め翻訳した数多くの詩篇を収めた訳詩集『リラの花』を出版した。⁹⁴計一三名の詩人の計二一六詩篇を収めたもので、パリ滞在中、同じアパルトマンで親交のあった梅原龍三郎が装幀に絵を寄せている。寛は渡仏前からフランス語の個人指導を受けていたし、フランス滞在中は実地に勉強しながら翻訳を続けていたことが次の回想からうかがえる。「僕は巴里に居る間語学のために専ら詩を読んだ。(・・・)日本を立つ時から若い詩人等の思想を知りたいと思って居たので、詩を読むにも多く若い作家のを雑誌や新しい詩集から撰んで読んだ。(・・・)青年詩人 NOEL NOUËT 君などから評判を聞いた

詩人の作を読んだ。それから読む許りでなく訳した方が語学のために益する所が多からうと思って、僕は折折外出せずに下宿に籠って居る雨天の夜などに、(・・・)もとより覚悟の前の拙い訳を試みたのであった。(・・・)柄にない大胆な自由訳を避けて、小心なくぐだしい逐語訳の体を取った。」大詩人だけでなく、マイナーな新人まで、ほとんど手当たりしだいというぐあいに『リラの花』に収録しているが、大部分はパリで訳したもので、「他は昨年一月帰国以来本年八月までの巴里の新聞雑誌に載った新作を訳した」と寛は明らかにしている。

当時の新思潮である「生の創造と賛美」を標榜し「彫刻の RODIN 氏に匹敵する巨人 VERHAEREN 氏(・・・)の芸術は優者の芸術として何よりも崇拜して居る」と述べているヴェルハーレンについては、一八詩篇を訳出している。これらの詩篇はすべて、前掲のヴェルハーレンとの会見記に出てきた最新詩集『そよぐ麦』(一九一二)から選ばれたものである。そして、これら一八篇のうち「金貨」、「琴弾き」、「牧場」、「燃ゆる少女」(『リラの花』では「熱情の少女」、「恋人等」(同「情人」)の五篇は、『リラの花』の出版に先がけて、大正二年四月「帝国文学」に掲載された。⁹⁵『そよぐ麦』は、寛に紹介状を書いてくれた「メルキュール・ド・フランス」編集長のアルフレッド・ヴァレットに捧げられている。第一詩集『レ・フラマ

ンド』と同じく、フランドル大地の息吹きと共鳴・共振する詩集だが、第一詩集では定型詩のしほりから解放されていなかった詩人が、それから三〇年をへてこの詩集ではすでに自由詩を完成させ、より深く豊かな律動と、よりシャープな対象把握力をもって、フランドル人の生活と行動・面貌を詠っている。

La Fille ardente

Vents, dénouez mes longs cheveux,
Et brûlez-en mes amoureux.

Mouillez mes mains, fraîche rosée.
Et qu'aussitôt mille desirs
Se rassemblent pour les saisir
Quand je les tends de ma croisée.

Pluie amante, lavez mes yeux
Pour qu'ils soient clairs comme l'audace
Et que les bourgs par où je passe
Sentent flamber mon coeur en feu.

Et vous, soleil, dorez ma tête.
Dorez mes seins, et tout mon corps
A l'heure où l'amant le plus fort

Courbe mes reins sous sa conquête.

Vents, dénouez mes longs cheveux
Et brûlez-en mes amoureux.

熱情の少女

風よ、ときほぐせ、ほぐせ、わたしの長い髪を。
そして、煽れ、煽れ、わたしの恋人等を。

新しい露よ、濺げ、濺げ、わたしの手に、
そして、今すぐ、わたしの願いのかずかずを、
窓から取らうとする時に、
集れ、集れ、掴むままに。

美しい雨よ、洗へ、洗へ、わたしの目を、
大胆剛気の人として、凜凜しく輝く其為に。
わたしの通る街街が、
火に燃えるわたしの心を知る為に。

また、太陽よ、黄金で飾れ、飾れ、わたしの頭を。
飾れ、わたしの胸を、また、わたしの体を、
最も強い恋人が、わたしの肉を押伏せて、
戦ひに勝つ其時に。

風よ、ときほぐせ、ほぐせ、わたしの長い髪を。
そして、燐れ、燐れ、わたしの恋人等を。

第二聯は、誤訳しているために意味の通じない内容になっているが、語学力はともかく、なによりも詩人としての資質を頼りに力ずくで訳す寛の筆力が、奇妙にヴェルハーレンの鼓動と共鳴し合う効果を生んでいる。寛はヴェルハーレン詩を特徴づける、たたみかけるようなリズムと響きを、よく写しとっているが、こうした詩的律動がまもなく高村光太郎に受容されていく。

『リラの花』の功績の一つは、ヴェルハーレンを称えてフランス詩史における彼の栄光を詠ったポール・コステルの詩を収録したことである。一九一〇年に出版された詩集 *La Bonne de Vire* の詩篇 *Les Poètes neurasthéniques* のなかで、

生の詩人、ああ彼等は終に来りぬ。

VERHAERENよ、汝は此処にあり、

他の同じ詩人等も此処にあり。

こは生を渴望する強者にして憂世家なり、
戦士にして使徒なり。

彼等は生と、生の絶大なる力とを歌へり。
彼等は魂と、色彩と、形とに

陶醉しつつ、
熱騰せる言語を以て生を創造せり。

彼等は激音と、叫喚と、騒音とを歌へり。

彼等は本能と、飛躍と、

石弩の如き猛烈なる革命と、

狂暴なる節奏を有てる情欲とを歌へり。

更に彼等は豊富なる詞藻に由って

より熱烈なる他の偉業を成しぬ。

と位置づけ、さらにもう一つの詩篇 *Ces Poètes* のなかで、

ああ此処に、終に、醇化されたる野蛮人、

言語を粉碎せんばかり

荒く、剛く、激鳴する思想に

その言語を服従せしめたるヰルアアランは来れり。

赫灼たる神妙の詩人ヰルアアランは

強烈なる感覚と、巨大なる都市と、

工場の煙に曇れる空と、

新しく生まんとする、触手ある都市の情欲と、

(・・・)

更に、豊饒なる田園の大観と、

(・・・)

白耳義の田舎の狭き路と、

その故国の無聊と安静とを歌へり。

と、ヴェルハーレンの詩業の鳥瞰図を描いている。コス

テルのこのヴェルハーレン賛歌は、大正期のヴェルハーレン移入史においてきわめて重要な資料であった。

〈注〉

- (1) 森林太郎『鵑外全集』第六卷（岩波書店、昭和四七年）三二〇～三二二頁
- (2) 『鵑外全集』第二七卷、九二二頁
- (3) 前掲書、六二六頁
- (4) 前掲書、六七七、六八五頁
- (5) 前掲書、二九三頁
- (6) 前掲書、八六〇頁
- (7) VERHAEREN, Emile : *Les Aubes*, Bruxelles, Edmond Deman, 1898; *Le Cloître*, Bruxelles, Edmond Deman, 1900; *Philippe II*, Paris, Mercure de France, 1901; *Elena Spartanskaja*, perevod Valerija Brjusova, Moskva, Knigoizdatel'stvo "Skorpion", 1909; *Helena's Heimkehr*, Dem unveröffentlichten Manuskript nachgedichtet von Stefan Zweig, Leipzig, Insel-Verlag, 1909; *Helene de Sparte*, Paris, Nouvelle Revue Française, Marcel Rivière, 1912
- (8) 『鵑外全集』第二七卷、四一七頁
- (9) 前掲書、七二四頁
- (10) MABILLE DE PONCHEVILLE, A : *Vie de*

Verhaeren, Paris, Mercure de France, 1953, p. 430

- (11) 『鵑外全集』第二七卷、三三三、四二九、九一〇頁
- (12) MABILLE DE PONCHEVILLE, A : *Op.cit.*, p. 108-109
- (13) 「歌舞伎」一三九号（明治四五年一月）一七頁、一四〇号（明治四五年二月）一六頁、一四一号（明治四五年三月）一八頁、一四二号（明治四五年四月）四八、五二頁、一四五号（明治四五年七月）二九、三四頁、一四六号（明治四五年八月）二六、二九頁、一四七号（明治四五年九月）一六、一二頁、一四八号（明治四五年一〇月）三二、三三頁、一六八号（大正三年六月）一四、一八頁（この号から『僧院』のタイトルに「観潮楼一夕話」と傍記）、一六九号（大正三年七月）一二、一七頁、一七〇号（大正三年八月）四五、五〇頁、一七一号（大正三年九月）四六、五一頁（完結）
- (14) 『稻妻』（通一舎、千朵山房叢書、大正四年）一六一～三一九頁
- (15) VERHAEREN, Emile : *Le Cloître*, Paris, Mercure de France, 1909, p. 102
- (16) VERHAEREN, Emile : *Drei Dramen*, Nachdichtung von Stefan Zweig, Im Insel-Verlag zu Leipzig, 1910, p. 185-186
- (17) 『鵑外全集』第一〇卷、一九七頁
- (18) 『鵑外全集』第三五卷、六三四頁

(19) 鈴木春浦「鵑外先生」(「新小説」臨時増刊、特集文豪鵑外森林太郎、大正一年八月、八―一〇頁)

(20) 新城和一訳「フィリップ二世」(「白樺」第九年四月号(大正七年)、一一九―一六八頁、同五月号、五四―七〇頁)

(21) 与謝野寛・晶子『巴里より』(金尾文淵堂、大正三年、二二〇頁)

(22) 前掲書、二頁

(23) 前掲書、三八七―三八八頁

(24) 高村光太郎「訳詩三章」のうち「あはれなる者(二月)」「創作」第一巻第五号、明治四三年七月、一二三頁

(25) 『巴里より』三九〇頁

(26) 筆者が一九九七年ブリュッセルのアルベール一世王立図書館の客員研究員として文学資料館で資料調査にたずさわった折、与謝野寛のサン・クルーでのヴェルハレン会见記を仏訳してヴェルハレン研究の専門家たちに提示したとき、日本にこれほど貴重な資料があり、今まで研究者たちの眼にふれなかったのは信じがたい、と皆ひとしく興奮を抑えがたい体であった。

(27) 前掲書、四五七―四六〇頁

(28) 与謝野晶子『春泥集』(金尾文淵堂、明治四四年)上田敏の序文がついているが、ヴェルハレンについてもふれ、「夏秋の頃は都会に遠い、鉄道を離れた田園の一小

村落に閑居して、大作の孵化に余念なく、或時は簡素なる書齋に孤坐して、高遠なる思想の夢に耽り、また或時は田野を跋涉して、大自然と対話し、これを其足踏の節奏に似た自由詩形の律語に現はすといふ」と書いている。

(29) 小論「エミール・ヴェルハレンの *Images Japonaises* をめぐって」(神奈川大学「国際経営論集」No. 16・17, 1999. 3; p. 85-106) 参照

(30) 与謝野寛『リラの花』(東雲堂書店、大正三年)

(31) 前掲書、九―一〇頁

(32) 前掲書、一一頁

(33) VERHAEREN, Emile: *Les Blés moutants*, Paris, Georges Crès, Les Maîtres du Livre, 1912

(34) よさの・ひろし訳「金貨外四篇」(「帝国文学」第一九巻第四、大正二年四月)、「金貨」六〇―六三頁、「琴弾き」六三―六七頁、「牧場」六七―六九頁、「燃ゆる少女」六九―七〇頁、「恋人等」七一―七三頁

(35) VERHAEREN, Emile: *La Fille ardente*, in *Les Blés moutants*, in *OEUVRES IV*, Genève, Slatkine Reprints, 1977, p. 117-118

(36) 『リラの花』四二―四一五頁

(37) COSTEL, Paul: *La Bonté de Vire*, Paris, Librairie Léon Vanier, 1910, p. 19, p. 27-28